

はじめに

阪神・淡路大震災から 25 年。長いようで、瞬く間のように感じられたこの間、私たちは、成熟社会を見据えた創造的復興をめざし、内外からの温かいご支援を力に変え、県民一丸となって懸命に歩んできました。苦難の連続でしたが、そこで得られた経験や教訓は、東日本大震災をはじめ内外の被災地の復興に生かされています。



過去から学び、未来へつなぐことが大切です。しかし、被災地兵庫でも震災を経験していない県民が増え、震災が風化しつつあるのではないかと懸念があります。さらには近年、地震や豪雨災害は頻発・激甚化しており、近い将来、南海トラフ巨大地震の発生も確実視されています。震災 25 年の節目の年に、改めて原点に立ち返り、次なる時代の安全を期さねばなりません。

震災を風化させないー「忘れない」「伝える」「活かす」「備える」。この基本コンセプトのもと、震災の経験と教訓を発信し、災害への備えや対策の充実につなげるため、兵庫県では、県民の参画と協働により、一年にわたり「阪神・淡路大震災 25 年事業」を展開しました。

1 月 17 日の「ひょうご安全の日」には、秋篠宮皇嗣同妃両殿下の御臨席のもと、「1.17 のつどいー阪神・淡路大震災 25 年追悼式典ー」を開催し、犠牲となられた方々に哀悼の誠を捧げるとともに、小中高校生の言葉と「しあわせ運べるように」の歌声に、明日への決意を改めて共有しました。

また、メモリアルウォークや HAT 神戸での防災訓練では、約 5 千人の方々が、冷たくて厳しいあの日を追体験しました。

自主防災組織や自治会等の防災学習会など、県民自らが主体となって取り組む防災・減災活動も幅広く展開されました。なかでも、「震災 25 年若者キャンペーンプロジェクト」では、震災後に生まれた若者グループが企画した 17 の自主的な取り組みが行われました。さらに、国際防災関係機関等による国際フォーラムや、創造的復興を総括し未来へ提言するシンポジウムなど、県内各地で実施した記念事業は 100 以上にのぼります。

こうした取り組みを継続していくことが重要です。それにより、家庭や地域、職場などあらゆる生活の場面で、一人ひとりが防災について考え、行動する「災害文化」のさらなる定着をめざします。

また、耐震化などの地震対策、防潮堤の強化などの津波・高潮対策、治山・砂防の推進のほか、災害時要援護者の避難対策、新型コロナウイルス感染症を踏まえた自然災害と感染症との複合災害への備えなど、ハード・ソフト両面の防災・減災対策を進めます。

本格的な令和の時代を迎えた今、県民、団体、企業、行政が一体となって、安全安心な社会を築き、その基盤の上に、人と地域の未来に夢や希望が広がる「すこやか兵庫」を実現していかなければなりません。阪神・淡路大震災からの創造的復興を成し遂げた県民の知恵と力を再び結集し、日本を先導する兵庫づくりをともに進めましょう。

ひょうご安全の日推進県民会議会長

兵庫県知事 井戸敏三